第１８１号
平成１６年１０月
© 2004
E-mail :
shimz@mb.infoweb.ne.jp
LDG04167@nifty.ne.jp

SCだより

編集発行人
清水吉男
（株）システムクリエイツ
横浜市緑区中山町 869-9
電話/FAX 045-933-0379

Café りふれ

46回め

MENU
特製ブレンド 380
レモンティー 350
日替りケーキ 300
ぷろせす 無料
アルコールは置いていません

山の上からは紅葉の頼りも届くようになってきたが、太平洋の高気圧が依然として居座っているようで、一気に秋に転げる気配は見られない。どうやら１１月の中頃までかかるかも知れないかなと思いながら、毎朝、店の窓から見えるイチョウの葉の色を眺めている。

夕方になって、いつもの客が入ってきた。
「いらっしゃい」
彼は、軽く頭を下げて慣れた感じでカウンターの奥に座ったが、少々機嫌が悪そうだ。
「今日はまだ６時過ぎだよ」というと、
「落ち着かないので、今日は定時で変えることにしました」という。
「コーヒーはいつものでいいかな？」
「はい、お願いします」
「ちょっと豆を変えてみるね」
人は、こういう何気ない会話から落ち着きを取り戻すことができる。

「ところでマスター、コーディング・ルールってどう思います？」
「なんだい、のっけから」
「今度、うちの組織で“MISRA C”というコーディング規約を採用することになったので、チームの皆にそのように説明したのですが、メンバーの中には“自由な発想”が歪められるといって反発する人が出てきて、困っているところです」
「“自由な発想”ね。何時の時代も代わり映えのしない“発想”だね」
「私も、彼の気持ちは分からないでもないのですが」
「と言うところから判断すると、あなた自身は、コーディング規約の採用に積極的ではないのかな？」
「良く分からないのです。必要な気もするし、窮屈な感じも理解できますからね」
「なんだい。“必要な気もする”という程度かね？」
「いえ、必要性はわかるのですが・・」
「本当に分かっているのなら説得できるだろう。問題は、あなた自身にも規制の導入に迷いがあることだね。立場が違っていれば、その人と同じことを言ったのではないか？」と言われて黙ってしまった。

どうやら、メンバーの発した、魅力的な響きを持つ言葉に誤魔化されてしまったようだ。
「そもそも、彼の言う“自由な発想”とは何だと思うかね」
カウンターの向こうでしばらく考えて、
「今、考えてみると、“慣れ親しんだ方法”ということのように思います。“自由”という言葉に惑わされたかもしれません」
「そうだね。本来、エンジニアリングの世界に於いては、コーディングの段階で“自由な発想”という余地はほとんどないし、あるとしても、今回導入しようとしているコーディング規約で壊されるようなものではない」
「結局は、慣れたやり方を変えさせられる事に対する反発でしょうか」
「誰も、身に付いた習慣を変えることには抵抗があるよね。プロセスの改善は、もっと広い範囲での習慣の変更だから、抵抗は、コーディング規約に対するものとは比べ物にならない」
「それは、これぐらいで、足並みを揃えられなければ、CMMなどのプロセス改善への取り組みはあり得ないということですね」
「そういうことだね。それよりもなぜコーディング規約を導入するのか、という根本を認識する必要があるね」

「マスターは、以前に“品質”はプロセスを安定させることと、若干の冗長を持ち込むことだと言われましたよね」
「確かに言ったけど、それは品質を“維持する”ことの話しだよ。今回の課題は品質の維持とか安定とかではないだろう？」
「はい、部長の話では、品質の“向上”と“保守”が狙いということでした」
「だったら、品質の向上には、ある程度の“規制”は欠かせないね」
しばらく間が合って、
「確か、構造化プログラミングにも、そのような狙いがあったと聞いたことがあります」
「そうだね。当時はアセンブラなども多く使われていたから、今とは比べ物にならないほどミスが多かったし、第一、他の人が保守するのは大変だったからね」
「それで、“３つの部品”でコードを書こうという話しでしたよね」
「そう、コーディングに芸術性を楽しんでいた人には“不自由”を強いたわけだ。でもあれがなければ、今日の発展はなかっただろうな」
「C言語のように最初から３つの部品が組み込まれた言語も作られましたしね」
「ちゃんと初歩を勉強したようだね。何れにしても、節度を超えた“自由奔放”は品質を損ねる最大級の要因と言ってもいいだろう」
「それと、今日ではソフトウェアの活躍範囲が広がったことで、インターネットなどのプログラムのミスは社会を混乱させますし、組み込みシステムでは人の命に関わることも考えられますからね。自動車もソフトウェアの塊になってきましたから、慎重でなければいけないと考えるようになったのでしょう」
「それならもっと早い段階で規制を取り込んでも良かったのかもしれないね。最近の自動車のリコールの背景には、メカの問題よりもソフトの問題が多くなっているのではないかと思っているんだがね」
話しが一段落したところで、テーブルの客に水を持って行くことにした。

「ところで、今回の規制を導入する際の動機になっているもう一つの“保守”というのも重要なテーマだね」
「はい、コードの量が増えて来ていますので、その分だけ保守は重い課題です」
「保守は、昔からあるのだが、ここで意識されだした理由は何かね」
「そうですね、私が認識しているのは、コードのボリュームが大きくなったことと絡むところがあるのですが、開発のコストの問題も大きいと思います」
「というと？」
「出来るだけ、既存のコードに手を加える程度で使い続けようという感じです」
「一度作ったソースコードを長く使おうというわけだ。易しくないね」
「少し前に、“プロダクト・ライン”の話しを聞いてきたのですが、あれも、最初から保守しやすく作っておかないと、看板倒れになってしまうと感じました」
「なるほど、“プロダクト・ライン”では１０年先のことまで考えているが、実際には積み木のようなわけには行かないと」
「はい。現実には簡単にモジュールを足していけるような世界ではないですからね。マスターがおっしゃっている“派生開発”が重要になってくると思います」
「保守で手を加える度に新しいトラブルが発生していたのでは困るからね」
「保守についてのプロセスを安定させないと、現場のエンジニアが振り回されてしまいます」
「そこまで認識出来ているのに、“自由な発想”のメンバーを説得できなかったのかね」
と言われて、ばつの悪そうな顔をしている

「たぶん、私自身も若い頃は同じような感想を抱いた事があるからだと思います」
「だったら、その体験も含めて、チームの皆に話しをしてあげればいい。“自由”にあこがれていた者が、どうして“規制”を受け入れるようになったかを話してあげればよい。もっとも、そんなに大げさな規制ではないがね」
「そうですね。考えてみます」
「ところで、生産性データと品質データは取っているかね」
「はい、一応プロジェクト毎に報告書にまとめていますので」
「それは“全体”のデータかね？」
「はい、そうですが」
「機能別とか担当者別といった個別には取っていないのかね？」
「組織として、特にそのような指示はでていませんので」
「うーん、個別のデータがあれば、先の“自由な発想”を言い出したエンジニアのデータも見えるのだがね」
しばらく間が開いてから、
「私の判断で収集するようにしてみます」
と言った顔が緩んでいた。
どうやら、“自由な発想”のメンバーの問題が見えたようだ。 ■

コーディングひとつでも、先の事まで考えて取りかかるのが「プロ」の仕事である。そうでなければ「貢献」したことにならない。

(C) Copyright 2004 System Creates Inc., All rights reserved

暁鐘の音 164

神戸の地震が活かされたか？

中越地方で起きた地震は大きな被害をもたらした。震源が浅く直下型の地震であったために、震度の数字以上に被害が大きい。この地方独特の地形や地質も被害を大きくしたようだし、大きな余震が何度も続いたことも被害を膨らませた。また「神戸」とちがって山間部での被害が多く、一本の道路が寸断されることで被災地が孤立し、そのことで救済の遅れに繋がったようだ。ただ、ガス会社が事前にガス管を取り変えていたようで、火災がほとんど発生しなかったことが不幸中の幸いである。

●◆●

最初の地震が週末だったこともあってテレビで様子を見ていたが、緊急時の行政の対応の中に「神戸」の経験が活かされている箇所は少なかったように思えてならない。「神戸」のあと、日本では「危機管理」という言葉が定着したぐらいだから、政府の方もここに「予算」を投入したものと思われるが、もしかすると、それは中央官庁の「危機管理室」の整備や地方との連絡網の整備が中心だったのかと思ってしまう。

●◆●

集中豪雨や台風などの水害と違って地震の発生は予測できないので、発生前に避難指示は出せないため、最初の地震に対して被害者が出てしまうことは避けられないかも知れない。これに備えるには、壊れにくい建物や街の構造にするしかない。

したがって、地震の場合は、発生した後にどれだけ速やかに必要な対応ができるかである。発生した地震の規模や場所に合わせて、細かな対応策を事前に用意しておくことが大事になる。都市部で起きる地震と、今回のように山間部を巻き込んだ地震とでは、対応策は異なってくるし、電気やガスが途絶えることは十分に想定されていなければならない。山間部では、一本の道路が途絶えると集落が孤立することも、想定の中に入っていなければならない。

●◆●

被災者の人数によって、非難場所の確保の枠を広げなければならないし、地震が発生する季節によっても避難場所での対応や確保する物資の種類が異なる。地域によっては、被災者の把握方法も重要だし、高齢者が存在も考慮される必要がある。それでも今回は、非常食や緊急時の水、毛布や一時しのぎの衣類、医薬品といった物資は、「神戸」の経験から自治体の方で確保されていたようだし、他の自治体で確保していた物資の輸送や人材の派遣もスムースに出来たようだ。

ただし、保存食だけで一週間もたせることは無理である。速やかに食料を調達する手段が必要になる。神戸の時には都市部ということもあり、周辺には弁当や食事を作る業者も多くあったが、地方ではそのような業者も少ないため、神戸の時のような供給体制を期待することはできない。そのことが、今回の震災で浮き彫りにされた。

●◆●

道路が使えない状況での状況の把握や災害救助などの手段として、ヘリコプターは重要になるが、長らく孤立状態のまま放置された集落が多かったことから、必要なヘリコプターの確保が不十分だったのか。

送電が途絶えた時点で通常の通信手段は使えない。だが行政は、通常の電気を想定した機器しか確保していないのではないか。

ソーラー発電機と通信装置をセットにすることは容易で、太平洋の孤島の酋長もそれを使ってタロ芋の注文を受けている時代である。そのような機材をそれぞれの集落に配っておくことで通信手段は確保できる。普段から定期交信に使っても良いし、それが届かない集落には、非常時に周辺の自治体から機材を集めてヘリコプターで一斉に配って回ればよい。こうした対応で、被災者の方も不安はある程度押えることができるだろう。どこにも連絡が取れないというのは、その状況に置かれている人たちにとっては過酷である。

●◆●

このほかに、地震の規模に応じて、継続的な食料の確保や、一時的な非難場所から中期的な避難場所への移動、さらには長期的な住宅の確保などのプランも必要になってくる。こうしたことが、各自治体の持つ「危機管理マニュアル」には書かれているのだろうか。まさか「全国一律」のマニュアルではないだろう。

●◆●

それと、行政が避難指示を出すのは良いが、それによって地域は無防備な状態になるので、盗難への対応も必要である。今回も、米を収穫した後なので、道路が使えるようになった地域では、「米泥棒」から守るために自警団を組んで二四時間見回っている。そのため、指定されている避難場所に行けないのである。避難指示を出す代わりに、警察や自衛隊の方で地域の警備にあたって貰わなければ、被災者は安心して避難できない。こうした細やかさが被災者の心を暖かくし、行政に対する信頼に繋がるのだが。

■

今月の一言

「他者への配慮も自己責任も、喪失したかのような日本の戦後の国民教育は、失敗だったと言わざるを得ません」

（櫻井よしこ著「大人たちの失敗」より引用）

この現象は若者に顕著に現れている。電車の座席に座って堂々と化粧（それも“フルメークアップ”）する若い女性が増えているし、駅の通路やコンビニの前に輪になって食べ物を前に座り込んでいる青年などが目に付く。人々も殺気立っているので街を歩くのも怖くなってきた。娘がベトナムに行った時、東京に行ったことがあるというフランス人に、「渋谷の街は狂っている」と言われたという。確かに「渋谷」は特異な状態であるが、「ミニ渋谷」は身近な所にも見ることができる。そこにあるのは、他者への配慮を欠いた「わがまま」である。

若者が勝手に今日のように他者への配慮を欠く存在になったのではない。この背後には、礼節を失った親の存在があり、今日の若者の姿は、彼らの親を含めた大人が「育てた」ものである。病院の待合室や多くの人がいるホームで走り回る子供や、レストランで大声ではしゃぐ子供はしばしば目にする。だが、これと同じ光景を大人にもみる事が出来る。例えば、分煙されていないレストランで、隣のテーブルで食事をしている人がいるのに、「個人の権利」の顔をしてたばこに火を付ける大人。駅のホームで歯間ブラシを取りだしてごしごし弄りだす大人。歩きたばこの吸い殻を道端に捨てる大人。

先日も、新幹線で私の隣りに座った六〇を過ぎていると思われる人が、何の躊躇もなく酒を飲みだす。そこは食堂車ではない。仕事帰りにいつも立ち寄る居酒屋と間違えている。このような人の行動からは、周囲の人への配慮は微塵も感じさせない。この六〇過ぎの大人は、戦後教育の失敗の第一作である。このままでは、日本の文化は消えてしまう。